

劣等感が大学デビュー行動及び抵抗感に与える影響の検討

武田 恒平¹・山田 耕一¹・北条 亜季¹・泉水 紀彦²

本研究では、高校時代に感じていた劣等感の諸側面が、大学入学1年間のふるまい方(大学デビュー行動)に与える影響の検討を目的とした。大学生206名(男性81名,女性125名,平均年齢19.58歳)に、大学デビュー行動,大学デビュー行動への抵抗感,劣等感尺度を含む質問紙を配付し,回答を求めた。大学デビュー行動を従属変数とした2要因(大学デビュー行動への抵抗感×劣等感)分散分析を行った結果,大学デビュー行動への抵抗感が高い群ほど大学デビュー行動得点が低かった。また同様に大学デビュー行動を従属変数とした2要因(抵抗感×劣等感下位尺度)分散分析を行った結果,「異性ととのつきあいの苦手さ」と「家庭水準の低さ」において,抵抗感との間の交互作用が見られた。高校生有的时候に,「異性ととのつきあいの苦手さ」に劣等感を強く感じていた人は,大学デビュー行動への抵抗感の有無にかかわらず,大学デビュー行動を行わない傾向がみられた。また,「家庭水準の低さ」の劣等感については,抵抗感以外の要因が大学デビュー行動に影響していた。これらの結果を受けて,高校時代の劣等感が大学生活に与える影響について議論を行った。

キーワード:劣等感,大学デビュー行動,新入生,自己変化

問題と目的

ツイッターやLINE,フェイスブックなどのソーシャルネットワークシステム(SNS)が広まり,現代社会では個人情報容易に交換できる状況となった。友達だけでなく,不特定多数の他者に自分の情報を発信したり,他者が発信する情報を受信したりする中で,他者の目を気にしたり,自分と他者を比較したりしてしまうことで,傷つき悩む若者が増えている(香山,2012)。

特に青年期は,第二次性徴期の急激な身体的変化を経験し,そのような身体的変化が他者との差異をより意識させると思われる。また,明らかな他者との差異は,青年の目を自己に向けさせ,身体的変化により自己評価が不安定になることも考えられる(高坂,2008)。さらに追い打ちをかけるように,青年期にあたる中学生や高校生,大学生は,受験や就職活動など,社会から競争を半ば強要されているような状況におかれることとなる。つまり,社会全体が他者との差や自他の相対的な位置を強く意識している状態(高坂,2008)であることを考慮すると,青年期は他の時期と比べ,心理的・社会的にプレッシャーがかかり劣等感が高まりやすい時期であると考えられる。劣等感とは,容姿,体力,性格などの点で自分が他者よりも劣っているという主観的な思い込みのことである(櫻井,1999)。

青年期の劣等感についての実証的な研究の多くは,

劣等感が生じる領域(劣等感の種類)を分類した研究である。その中で,いくつかの研究においては,児童期から青年期にかけて強く感じられる劣等感の種類が変化することが指摘されている(高坂,2008)。例えば,井上(1987)によると,小・中学生を対象とした自由記述調査から,小学校低学年では運動能力による劣等感の記述が多くみられるが,小学校高学年から中学生にかけては,運動能力よりも知的能力による劣等感の記述が多くみられることが明らかになった。また,塚野・水島(1997)は,小学3・5年生,中学1・3年生,高校2年生を対象とした調査を行っており,小学生よりも中学生の方が能力に関する劣等感が強いこと,高校生では身体・能力・性格・社会という4種類すべての劣等感が強いことを明らかにした。このように,児童期には一部分のみに感じていた劣等感が,高校生になると様々な側面で広範囲に劣等感を強く感じる事が示されている。青年期は多くの劣性を感じるが,そのうちの自分が重要であるとしている領域においてこそ,劣等感を感じていることが指摘されている(高坂,2008)。

実際に,高坂(2008)は,劣等感尺度を作成して,青年期の学生を対象に,青年期における劣等感の発達的变化を自己の重要領域との関連から検討している。その結果,「異性ととのつきあいの苦手さ」「学業成績の悪さ」「運動能力の悪さ」「家庭水準の低さ」「性格の悪さ」「友達づくりの下手さ」「統率力の欠如」「身体的魅力のなさ」といった8つの劣等感を感じる側面が明らかになった。発達の変化に関しては,中学生では「学業成績の悪さ」,高校生では「異性ととのつきあいの苦手さ」「友達づくりの下手さ」「身体的魅力のなさ」,

1 東京成徳大学大学院心理学研究科

2 東京成徳大学

大学生では「友達づくりの下手さ」の劣等感が高いことを明らかにしている。

日本学生支援機構（2007）によると、大学への入学からおよそ1年間は、学生が新しい大学環境に適応することが課題になると言われており、友達作りの困難や過剰適応による疲労といった対人関係や学生生活の悩みが生じやすいことが指摘されている。このような周囲との関係性を築くことの困難さに向かい合っていかなければならない高校生から大学生への変化時期には、周りにどうしても目が向き、他者との比較を意識してしまうことが予想される。そこで、本研究では高校生から大学生になる時期、すなわち大学デビュー期に焦点をあてる。本研究では、先行研究（中臺・石井・関・泉水、2016）と同様に、大学デビュー期に行う行動を大学デビュー行動とし、「大学入学を機に意識的に今までとは異なる新しい行動や外見に挑戦すること」と定義を行った。

本研究では、大学入学後に大学デビュー行動をとる要因として、青年期に高まった劣等感との関連を想定し、検討を行った。大学入学期に行われる一連の行動は、新しい大学環境への適応行動と捉えることもできるが、単なる適応行動としての意味だけでなく、大学入学を機に高校の時の自分とは異なる自己の実現、慣れないことを無理にしている自己変化の側面もあると考えられる。そのように考えたとき、大学デビューに取り組む動機として、高校生時代に抱えていた劣等感が深く関わっているのではないかと想定される。村上・佐藤・深田（2008）は、青年期における理想自己と現実自己の差異に関する研究で、理想と現実自己のズレが大きいほど劣等感も大きくなると示唆している。また、増田・高橋（2005）によると、大学生は理想自己と現実自己とのズレを認知した場合、多くはズレをなくす努力をする。現代の大学生は、周囲から目標に向かってがんばることの意義や重要性を説かれ、その理想や目標が自分には合わないものであっても（もしくはそれに気づくことなく）、いつかは実現できるかもしれないと頑張る可能性も考えられる。大学デビュー行動においても同様に、ステレオタイプとしての「大学生らしさ」を目標とすることで、無理に行動している場合が考えられる。上記の点については、大学デビュー行動の測定に加え、大学デビュー行動に対しての抵抗感を測定することにより、劣等感と大学デビュー行動の関連を精確に検討できると考えられる。

そこで、本研究は、大学生を対象に、高校時代の劣等感が、大学デビュー行動及びその抵抗感に対してどのような影響を及ぼすか検討することを目的とする。

方 法

調査協力者

関東圏の大学・短期大学に通う大学生206名（男性

81名、女性125名）であった。平均年齢は、19.58歳（ $SD=0.95$ ）で、学年は、1年生41名、2年生107名、3年生46名、4年生11名であった。

調査時期

2015年7月ごろ

調査実施手続き

各大学の授業担当教員に質問紙調査への協力を依頼した。教員には、事前に調査の説明を行った。調査の説明を行い、調査に協力してもらえる場合は、担当教員から実施の同意書を得た。担当教員と十分に相談し、授業を受講する学生の学習時間に影響が少ない日時を選び、実施した。質問紙を配布した後に、質問紙に添えた文書を口頭で読み上げながら、調査についての説明を行った。①研究の目的、②質問項目には正答がなく、率直に答えること、③心身に影響がないように十分配慮しているが不快になった場合には回答を中断できること、④自由意思による協力で、非協力の場合でも不利益が生じないこと、⑤協力に同意した場合でも回答の中断・撤回が可能なこと、⑥無記名調査であるので匿名性が保護されること、⑦回答データは厳重に管理し、外部に漏れることがないこと、⑧回答データは統計的に処理され、学会等で発表されること、⑨質問紙の提出をもって、協力への同意とすることを説明した。回答時間は15分程度であり、質問紙を回収し、調査を終了した。

質問紙構成

フェイスシート 協力者の属性（年齢、性別、所属学部学科、学年）について回答を求めた。

大学デビュー尺度 大学デビュー行動を測定するために、新たに作成した尺度である（項目の詳細については、中臺他、2016）。18項目について、1（全くあてはまらない）から5（よくあてはまる）の5件法で回答を求めた。「大学に入学した後1年間のことを振り返って回答してください」というリード文の後に、「ここでは、大学入学したことを意識してチャレンジしている行動について、お尋ねします。各文章について、自分にどれくらいあてはまるか最もあてはまると思う選択肢の番号に○をつけてください。」と教示し、回答を求めた。下位尺度は、「自分が目立つようにふるまっている」などから構成される積極的な対人関係、「ファッションに力を入れている」などから構成される外見や流行への興味関心である。本研究においても2項目（明るく社会的と見られるようにふるまっている、SNS(Facebook, Twitter等)の利用が多い)を除外して、分析を行った。

大学デビュー行動に対する抵抗尺度 大学デビュー行動への抵抗感を測定するために、大学デビュー尺度

の回答を1（全く抵抗を感じない）から5（非常に抵抗を感じる）の5件法で求めた。「大学に入学した後1年間のことを振り返って回答してください」というリード文の後に、「ここでは、大学入学したことを意識してチャレンジしている行動について、お聞きします。あなたがこれらの行動をした際感じた、もしくは行動をしようとしたら感じるであろう抵抗感についてお尋ねします。各文章について、自分にどれくらいあてはまるか最もあてはまると思う選択肢の番号に○をつけてください。

劣等感尺度 高坂（2008）が作成した、青年期における劣等感をはかる尺度である。46項目について1（まったく感じない）から5（とても感じる）の5件法で回答を求めた。「高校生の時を振り返って答えてください」というリード文の後に、「次の文に出てくる事柄について、普段どのくらい自分が人と比べて劣っていると感じますか。具体例をよく読んで、5「とても感じる」から1「まったく感じない」のなかから、あてはまるものを一つ選んで、○をつけてください。実際に劣っているかではなく、自分で劣っていると感ずるかどうかで回答してください。」と教示し、回答を求めた。下位尺度は、異性とのつきあいの苦手さ、学業成績の悪さ、運動能力の低さ、家庭水準の低さ、性格の悪さ、友達づくりの下手さ、統率力の欠如、身体的魅力のなさ、の8つである。

結 果

大学デビュー行動尺度、抵抗感尺度および劣等感尺度の信頼性の検討

大学デビュー 16項目の内的一貫性を検討したところ、十分な信頼性（ $\alpha=.90$ ）が確認されたため、16項目の得点を合計し、大学デビュー行動得点を算出した。また、下位尺度の内的一貫性を検討したところ、十分な信頼性（積極的な対人関係10項目： $\alpha=.87$ ；外見や流行への関心6項目： $\alpha=.84$ ）が確認されたため、各項目を合計し、積極的な対人関係得点、外見や流行への関心得点を算出した。

大学デビュー行動への抵抗感については、大学デビュー行動尺度と同様に16項目の合計得点を算出した。

劣等感尺度46項目の内的一貫性を検討するため、信頼性の分析を行った。その結果、全項目は $\alpha=.97$ 、各下位尺度については、異性とのつきあいの苦手さ6項目（ $\alpha=.94$ ）、学業成績の悪さ（ $\alpha=.94$ ）、運動能力の低さ（ $\alpha=.94$ ）、家庭水準の低さ（ $\alpha=.90$ ）、性格の悪さ（ $\alpha=.91$ ）、友達づくりの下手さ（ $\alpha=.92$ ）、統率力の欠如（ $\alpha=.90$ ）、身体的魅力のなさ（ $\alpha=.86$ ）となり、十分な信頼性が確認された。内的一貫性が確認されたため、全項目と各下位尺度の合計得点をそれぞれ算出した。各変数と劣等感下位尺度の平均値、標準偏差を

Table1 大学デビュー行動得点及び抵抗感、劣等感尺度の平均値と標準偏差

	M	SD
大学デビュー行動	39.06	13.20
大学デビュー行動に対する抵抗感	42.06	13.92
劣等感合計得点	114.62	40.24
劣等感下位尺度		
異性とのつきあいの苦手さ	14.57	6.79
学業成績の悪さ	16.75	7.31
運動能力の低さ	14.53	6.91
家庭水準の低さ	11.57	5.47
性格の悪さ	17.96	7.12
友達作りの下手さ	14.75	6.69
統率力の欠如	12.99	5.68
身体的魅力のなさ	11.78	4.66

Table1に示した。

劣等感と大学デビューへの抵抗感が大学デビュー行動に与える影響の検討

高校生の時の劣等感と大学デビュー行動に対する抵抗感が、大学でのデビュー行動にどのような影響を与えているかを検討するために、大学デビュー行動得点を従属変数、大学デビュー行動への抵抗感（低/中/高）と劣等感全体（低/中/高）を独立変数とした2要因分散分析を行った。群分けは、それぞれ得点分布の人数が等分となるように3群に分割した。その結果、抵抗感の主効果が有意であったが（ $F(2, 178)=5.68, p<.01$ ）、劣等感の主効果・交互作用はみられなかった。大学デビュー行動への抵抗感が高い群ほど大学デビュー行動得点が低くなった。つまり、大学デビューへの抵抗感が強い人は大学デビュー行動を行わない傾向がみられた。劣等感全体群と抵抗感群における大学デビュー行動得点の平均値をFig.1に示した。さらに劣等感の下

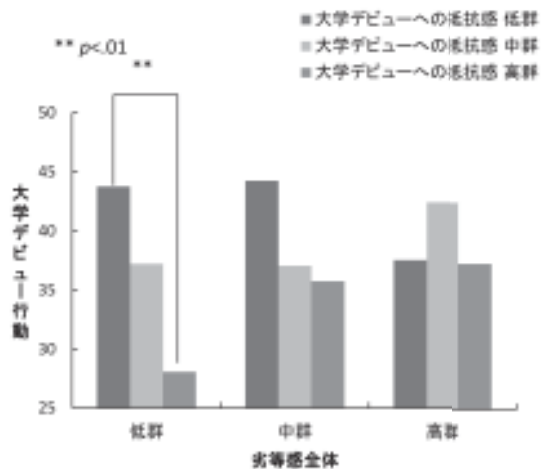


Fig.1 劣等感全体群と抵抗感群における大学デビュー行動得点の平均値

位尺度（異性とのつきあいの苦手さ、学業成績の悪さ、運動能力の低さ、家庭水準の低さ、性格の悪さ、友達づくりの下手さ、統率力の欠如、身体的魅力のなさ）が大学デビュー行動に与える影響を検討するため、劣等感の各下位尺度得点（低/中/高）と大学デビュー行動への抵抗感（低/中/高）を独立変数とし、大学デビュー行動得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。各劣等感下位尺度の群分けは、劣等感尺度と同様に、人数が等分になるように3群に分割した。その結果、劣等感の各下位尺度得点の主効果は認められなかったが、劣等感の2つの下位尺度得点（異性とのつきあいの苦手さ、家庭水準の低さ）と抵抗感との交互作用が有意であったため（異性とのつきあいの苦手さ： $F(4,183)=4.52, p<.01$ 、家庭水準の低さ： $F(4,184)=2.75, p<.05$ ）、それぞれ単純主効果の検定を行った。

まず、「異性とのつきあいの苦手さ」と抵抗感の交互作用を検討したところ、「異性とのつきあいの苦手さ」劣等感低群においては、大学デビューへの抵抗感低群と中群との間に有意差があり（ $p<.05$ ）、かつ大学デビューへの抵抗感低群と高群との間にも有意差があった（ $p<.001$ ）。つまり、「異性とのつきあいの苦手さ」劣等感低群においては、大学デビューへの抵抗感が高いと大学デビュー行動を行わない傾向が認められた。また、大学デビューへの抵抗感低群においては、「異性とのつきあいの苦手さ」劣等感低群と高群との間に有意差があり（ $p<.001$ ）、かつ「異性とのつきあいの苦手さ」劣等感中群と高群との間に有意差があった（ $p<.01$ ）。つまり、大学デビューへの抵抗感低群においては、「異性とのつきあいの苦手さ」劣等感が高いと大学デビュー行動を行わない傾向があった。異性とのつきあいの苦手さ劣等感群と抵抗感群における大学デビュー行動得点の平均値をFig.2に示した。

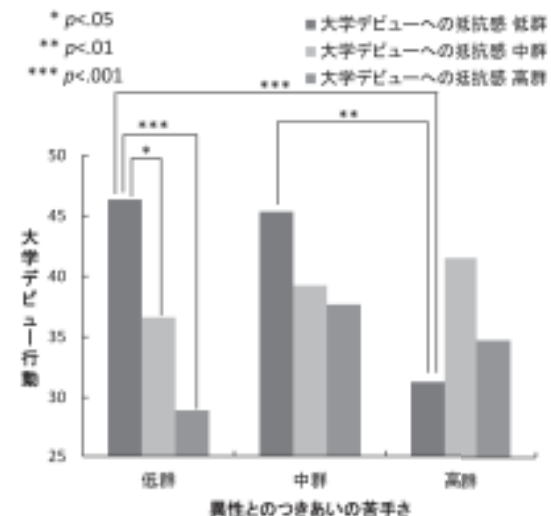


Fig.2 異性つきあいの苦手さ劣等感群と抵抗感群における大学デビュー行動得点の平均値

次に、「家庭水準の低さ」と抵抗感の交互作用を検討したところ、「家庭水準の低さ」劣等感低群においては、大学デビューへの抵抗感低群と高群との間に有意差があり（ $p<.01$ ）、かつ大学デビューへの抵抗感中群と高群との間にも有意差があった（ $p<.05$ ）。つまり、「家庭水準の低さ」劣等感低群においては、大学デビューへの抵抗感が高いと大学デビュー行動を行わない傾向があった。同様に、「家庭水準の低さ」劣等感中群においても、大学デビューへの抵抗感低群と中群及び低群と高群との間に有意差があった（ $p<.05$ ）。つまり、「家庭水準の低さ」劣等感中群においても、大学デビューへの抵抗感が高いと大学デビュー行動を行わない傾向があった。また、大学デビューへの抵抗感高群においては、「家庭水準の低さ」劣等感低群と高群との間に有意差があった（ $p<.05$ ）。つまり、大学デビューへの抵抗感高群においては、「家庭水準の低さ」劣等感が高いと大学デビュー行動を行う傾向があった。家庭水準の低さ劣等感群と抵抗感群における大学デビュー行動得点の平均値をFig.3に示した。

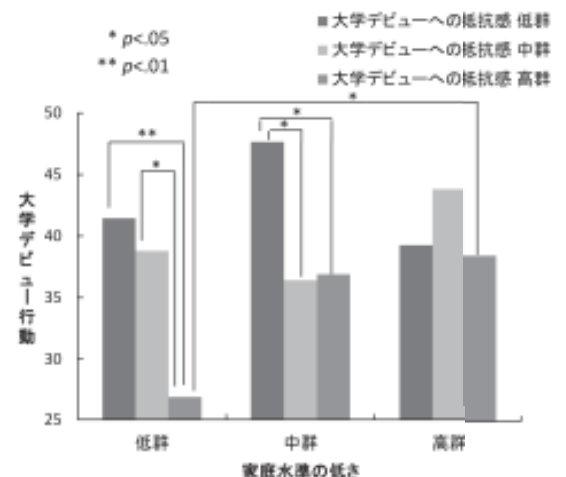


Fig.3 家庭水準の低さ劣等感群と抵抗感群における大学デビュー行動得点の平均値

大学デビュー得点について、その他の劣等感下位尺度群（学業成績の悪さ、運動能力の低さ、性格の悪さ、友達作りの下手さ、統率力の欠如、身体的魅力のなさ）と抵抗感群の交互作用はみられなかった。劣等感全体群及び各下位尺度群と抵抗感群の大学デビュー行動合計得点の平均値、標準偏差をTable2に示した。

考 察

本研究は、高校生の時の劣等感が大学デビュー行動及び大学デビュー行動への抵抗感に与える影響について検討することを目的とした。

結果をまとめると、高校生の時の劣等感が大学デビュー行動及び大学デビュー行動への抵抗感に与える

Table 2 劣等感と大学デビューへの抵抗感における 大学デビュー行動の平均値と標準偏差

大学デビュー得点	劣等感全体	大学デビューへの抵抗感					
		低 (n=64)	中 (n=65)		高 (n=63)		
			M	SD	M	SD	M
	低 (n=64)	43.76	15.94	37.22	9.50	28.08	17.51
	中 (n=61)	44.25	15.32	37.06	9.66	35.74	11.46
	高 (n=62)	37.54	13.69	42.41	9.41	37.26	12.50
異性とのつきあいの苦手さ	低 (n=65)	46.35	16.35	36.60	9.70	28.91	16.51
	中 (n=75)	45.33	8.76	39.25	9.52	37.67	12.17
	高 (n=52)	31.27	11.65	41.50	9.71	34.71	14.66
学業成績の悪さ	低 (n=68)	42.89	16.28	35.62	9.07	29.57	14.69
	中 (n=68)	41.88	12.03	41.45	8.94	38.07	14.76
	高 (n=57)	42.70	16.19	41.41	10.14	35.40	10.74
運動能力の低さ	低 (n=72)	45.03	15.86	37.12	9.35	30.79	17.47
	中 (n=60)	38.36	11.19	39.05	8.47	36.67	12.59
	高 (n=58)	40.94	16.60	41.59	11.24	35.48	11.40
家庭水準の低さ	低 (n=69)	41.44	14.87	38.79	10.60	26.92	15.55
	中 (n=72)	47.65	15.41	36.40	7.90	36.90	12.14
	高 (n=52)	39.27	14.68	43.81	9.28	38.43	13.47
性格の悪さ	低 (n=75)	41.83	15.90	48.81	12.35	36.92	14.09
	中 (n=59)	38.17	9.02	39.16	10.66	40.00	9.62
	高 (n=59)	31.06	16.58	37.96	13.87	35.87	11.07
友達づくりの下手さ	低 (n=68)	44.53	15.60	37.60	10.19	36.38	19.99
	中 (n=77)	43.45	16.05	41.22	7.89	34.65	11.53
	高 (n=47)	37.23	12.30	38.47	10.84	36.06	13.18
統率力の欠如	低 (n=69)	43.73	15.40	37.48	10.02	28.13	14.20
	中 (n=58)	46.38	16.02	39.00	8.12	40.04	13.22
	高 (n=65)	37.28	12.86	40.75	10.33	35.65	12.77
身体的魅力のなさ	低 (n=77)	45.71	15.77	37.08	10.48	32.73	15.81
	中 (n=52)	40.20	14.08	39.55	8.85	39.18	13.96
	高 (n=64)	39.17	14.31	41.00	9.27	35.12	11.61

影響について検討を行ったところ、大学デビューへの抵抗感が強い人は大学デビュー行動を行わない傾向がみられた。また、劣等感の下位尺度ごとの影響を検討するために分散分析を行った結果、「異性とのつきあいの苦手さ」劣等感並びに「家庭水準の低さ」劣等感と抵抗感との間に交互作用がみられた。それぞれ単純主効果の検定を行い、交互作用を検討したところ、どちらの劣等感においても「低・中群」においては、大学デビューへの抵抗感が強い人は大学デビュー行動を行わない傾向がみられたが、劣等感「高群」においては、こうした傾向は認められなかった。さらに、抵抗感「低群」においては「異性とのつきあいの苦手さ」への劣等感が高いと大学デビュー行動を行わない傾向が見られ、抵抗感「高群」においては「家庭水準の低さ」への劣等感が高いと大学デビュー行動を行う傾向が見られた。

まず、大学デビューへの抵抗感が強い人が大学デビュー行動を行わない結果が得られたことは、当然の結果であると考えられる。自分が目立つようにふるまっていることや、ファッションに力を入れていることといった行動に対して強い抵抗感を抱く人は、そのような行動に価値を感じず、大学デビュー行動を行わ

ないだろう。

しかしながら、劣等感「高群」においては、その傾向はみられず、大学デビューへの抵抗感の強い、弱いに関わらず大学デビュー行動に変化は見られない。また、大学デビューへの抵抗感「高群」では、「家庭水準の低さ」への劣等感が高い人は、低い人と比べ、大学デビュー行動を行うという傾向があった。これは大学デビュー行動に対する抵抗感の強さは大学デビュー行動に影響を与えておらず、それ以上に、家庭水準への劣等感が大学デビュー行動を動機づけたと考えられる。その一方で、大学デビューへの抵抗感「低群」では、「異性とのつきあいの苦手さ」への劣等感が高い人は、中程度の人や低い人と比べ、大学デビュー行動を行わない傾向がみられた。このことから、「家庭水準の低さ」への劣等感と「異性とのつきあいの苦手さ」への劣等感とでは、大学デビュー行動への抵抗感を介して、大学デビュー行動へ与える影響が異なった。

本研究の仮説では、高校生の際の劣等感の高さが、大学での大学デビュー行動への動機づけとなり、大学デビューへの抵抗感との兼ね合いで、実際の大学デビュー行動の強弱に繋がるのではという予測をしていた。本研究の結果は、仮説とは異なる結果であった。

こうした結果が生じた要因として、以下の2点の観点から考えられる。

一つは、劣等感が必ずしも大学デビュー行動への動機づけになっていない可能性がある。例えば、高校生時代に「異性とのつきあいの苦しさ」への劣等感を強く感じたとしても、劣等感をバネにして異性への積極的な行動をとるのではなく、「どうせ私なんか…」という無力感を抱くというようなことや、草食系男子(女子)のように異性との際際に対して強い魅力を感じないような対処をとっている現代の大学生の文化的・時代的背景が表れているとも考えられる。高坂(2009)は、劣等感は自己の劣性を認知したときに生じる否定感情(陰性感情)の総称であるという観点に立ち、どのような反応行動が生起するかは劣性を認知したときに生じる感情の違いによると考え、容姿・容貌に対する劣等感の具体的感情と反応行動との間に特定の結びつきがあることを確認した。したがって、ほかの劣等感においても劣等感の高低で反応行動が決定されるのではなく、劣等感の具体的感情によって反応行動が決定される可能性が考えられる。

もう一つとして、高校生時代に感じていた劣等感が大学デビュー行動への意欲に結びついたとしても、抵抗感以外の要因が実際の大学デビュー行動を妨げる可能性がある。例えば、高校生時代に「家庭水準の低さ」への劣等感を強く感じ、大学デビュー行動への意欲が高まり、大学デビューへの抵抗感がなかったとしても、経済的な問題によって実際の大学デビュー行動が妨げられる可能性が考えられる。

本研究では、新たに作成した大学デビュー行動を測定する心理尺度を用い、大学デビュー行動と高校生時代の劣等感の関連の検討を行った。大学デビュー行動は、劣等感と大学デビュー行動への抵抗感という要因だけでは説明できないことが明らかとなった。大学デビュー行動をする心理的機序は、もっと多くの要因が絡む可能性が考えられる。大学デビュー行動は、青年期でより多くの人と関わり、他者に合わせるといった社会への適応のための行動でもありと考えられるので、この心理的機序を解明することは大学生の自立への心理的支援にも役立つことが期待される。

したがって、本研究の問題点は、劣等感の高低にのみ注目し劣等感の具体的感情を考慮しなかったことと、大学デビュー行動に必要な心理面以外の要件を考慮しなかったことである。

そのため今後の課題としては、劣等感下位尺度ごとの具体的感情と反応行動との関係及び実際の大学デビュー行動を妨げる抵抗感以外の要因を明らかにすることである。そして、社会への適応行動でもありと考えられる大学デビュー行動に大学生が取り組むことができるようにすることが、大学生の自立への心理的支援の一つとなるだろう。

引用文献

- 独立行政法人日本学生支援機構(2007). 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」— Retrieved from <http://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/jyujitsuohosaku.html> (2015年7月13日)
- 井上信子(1987). 小・中学生における優越・劣等意識相談学研究, 19(2), 38-43.
- 香山リカ(2012). SNSを自在に使いこなす若者がSNSに傷つき悩んでいる Retrieved from <http://diamond.jp/articles/-/16108> (2015年7月13日)
- 高坂康雅(2008). 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達の变化 教育心理学研究, 56(2), 218-229.
- 高坂康雅(2009). 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連 教育心理学研究, 57(1), 1-12.
- 増田有亮・高橋靖恵(2005). B-5 大学生の理想自己と現実自己のズレ認知についての質的検討: 自尊感情との関連から(研究発表III) 日本青年心理学会大会発表論文集, (13), 70-71.
- 村上雅子・佐藤公代・深田昭三(2008). 青年期における劣等感—理想自己と現実自己の差異と自己に対する主観的価値判断 愛媛大学教育実践総合センター紀要, (26), 115-122.
- 中臺麗・石井琴子・関岡二・泉水紀彦(2016). 大学デビュー行動が適応感に及ぼす影響の検討 東京成徳大学臨床心理学論集(印刷中)
- 櫻井茂男(1999). 劣等感 中嶋義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司(編)心理学辞典 有斐閣
- 塚野州一・水島直純(1997). 劣等感の変容プロセスの見当 日本教育心理学会 第39回総会発表論文集, 188.

Effect of inferiority feelings on “University Debut behavior” in university student

Kohei TAKEDA (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Koichi YAMADA (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Aki HOJO (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Toshihiko SENSUI (*Tokyo Seitoku University*)

The present study aims to investigate that whether freshman’ s behavior(University debut behavior) were affected by their inferiority feelings in high school life. College students(N=206) completed a questionnaire including university debut behavior scale, scale of resistance feeling toward university debut behavior, inferiority feeling scale. Two-way ANOVA(resistance feeling × overall inferiority feeling) revealed that students who has resistance feelings toward university debut behavior engaged university debut behavior. Also, two-way ANOVA(resistance feeling×subscales of inferiority feeling) was used to analysis the data. As a result, there were significant interactions between subscales of inferiority feelings(to “socially awkward with the opposite sex” / to “low household-level”) and resistance feelings toward university debut behavior. Regardless of the extent of resistance feelings, students who had inferiority feeling to “socially awkward with the opposite sex with the opposite sex” , had small degree of university debut behavior. Inferiority feelings to “low household-level” had a small effect on university debut behavior. Following the findings, we discuss whether freshman’ s behavior were affected by their inferiority feelings in high school life.

Key words: inferiority feeling, university debut behavior, freshman, self-change.

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University

2016, Vol. 16, pp. 70-76